

岩崎久彌 ゆかりの地

～小岩井農場～

林 田 利 之

1. 小岩井農場の始まり

1888（明治21）年6月12日。この日、盛岡を訪れていた明治政府の鉄道庁（当時鉄道局）長官、井上 勝（図1）は眼前に広がる岩手山の南麓に広がる風景に目を奪われていました。それは、木もまばらな不毛の原野でした。奥羽山脈から吹き降ろす冷たい西風のなか、ススキや柴、ワラビなどが散在する火山灰地を前に、井上は、この荒れ果てた土地に大農場を拓くという、かつて誰も抱いたことのない夢を抱いたのです。



図1 井上 勝

井上 勝は、日本の鉄道の父と言われる人物です。幕末の動乱期にイギリスに密航した伊藤博文、井上馨ら5人の長州藩士、いわゆる長州ファイブ（図2）の一員で、近代土木技術、鉱山学などを学びました。帰国後は、1872（明治5）年の新橋 - 横浜間の日本最初の鉄道敷設を始めとして、東海道本線、東北本線など、数々の鉄道工事で陣頭指揮にあたり、日本の鉄道事業の基礎を作りました。盛岡を訪れたのも東北本線の延伸工事視察のためでした。

岩手山南麓に広がる荒地を前に、井上の胸に去来したのは、長年、鉄道敷設事業に携わる中で、数多くの「美田良圃（びでんりょうほ：美しい田と良い畑）」を潰したことに対する悔恨（かいこん）の念だったといいます。このような荒地が手付かずで放置されているのであれば、せめてそれを開墾して大農場を拓くことで、美しい田園風景を損なってきたことの埋め合わせをしたい。それこそ、国家公共のためであり、自分がなすべき事業ではないか。井上はそう考えたのです。

井上は、この構想を岩崎彌太郎（図3）のもとで三菱を支えていた小野義真（図4）に打ち明け、助力を依頼します。当時、三菱社は、彌太郎の死後、実弟の岩崎彌之助が第2代社長に就いていました。小野義真は、早速、井上と彌之助を引き合わせます。国家公共のため、荒地に農場を開きたいという井上の高邁（けだかく優れていること）な願いに感銘を



図2 長州ファイブ

受けた彌之助は、その場で出資を快諾したといいます。こうして1891（明治24）年1月1日、井上が場主となり小岩井農場（図5）が開設されました。小岩井という名前は、小野、岩崎、井上の3人の苗字から1字ずつ取って作られたものです。



図3 岩崎彌之助

(1851~1908)

三菱社社長。土佐藩（高知県安芸市）出身。三菱の創業者・岩崎彌太郎の実弟。1885（明治18）年、彌太郎没後、三菱の第二代社長となる。海運から鉱山・炭鉱・造船・金融・不動産などに進出し、三菱の事業の多角化を図る。1896（明治29）年から2年間、第四代日銀総裁も勤めている。



図4 小野義真

(1839~1905)

日本鉄道会社副社長。土佐藩（高知県宿毛市）出身。藩政時代は郷里の大庄屋であったが、維新後官途につく。退官後、三菱の創業者岩崎彌太郎の知遇を受け、その代理として三菱のために各方面に活躍する。日本鉄道会社には三菱を背景として参画し、後に社長となる。

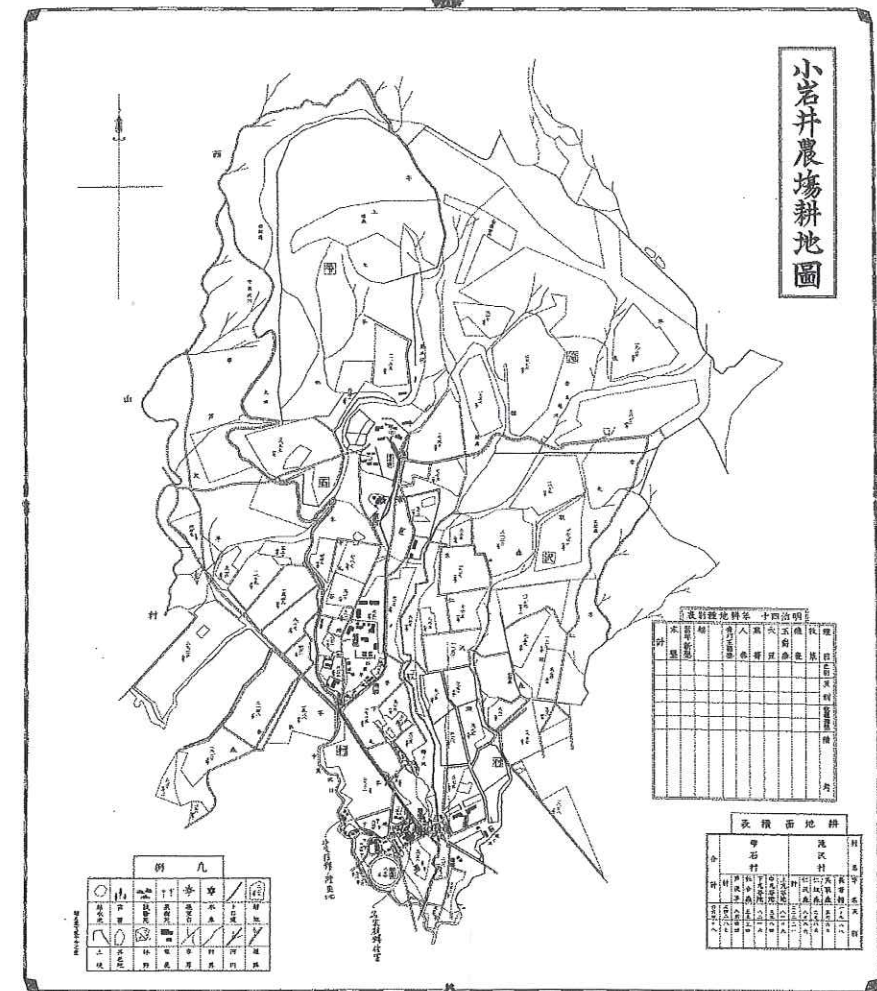


図5 明治40年の小岩井農場